オレにも言わせろ!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

Vol.79

行政はコーンに関与するな……って言ったけど

宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

実取りコーン1年目

本年5月22日に花巻でイアコーン（実取りコーン）の勉強会が行なわれた。たぶんイカツイ顔をして日本国標準語の発展型である、「そーずん語」の美しき響きを期待しつつ、農家のことはよく知っているが農業のことは……の普及所、試験場関係者に混じり、将来のビジネスチャンス、早い話、今後の市場の独占を目指すために無指向性国産アンテナをバリバリ立てているバイオ関連の会社、種子会社、農機具メーカーの集まり中に心躍る生産者が多くいた。

今年は11haにパイオニアの93日タイプ・コーンの播種を終わらせ、片道が2万3000円と東京に行くよりも高い航空運賃を節約するために、ネットで半額になるJALの株主割引券を購入してもまだ3000円節約しての参加だった。

150名以上が参加した会場では予定通りLとRの違いがはっきり分かる巻き舌に、格調高い鼻濁音の親父連中が我がもの顔でコーンの未来を語ってはいたが、目の奥に輝く黒い瞳からは真剣さがうかがえた。

マイクが私に渡され、**「北海道から来た金髪・ブルーアイ大好きのミヤイです」**と正直にカマシテしまった。そこで話した内容は2つ。まず、コーン自体は古い作物ではあるが、日本でのイアコーン栽培はこの5年程度の物語しかないので、生産者にとってはまさしく手探り状態であるので中途半端な行政の影響力は排除したいということ。もう一つはコーンが素晴らしいのであれば必ず遺伝子組み換え（GM）はどうなんだと言う議論に発展してほしい点だ。

では、本年の経緯を含めてもう少し詳しく説明していく。国内においてイアコーン栽培は最近の話であっても、類似する作物でサイレージ用デントコーンの栽培は半世紀の歴史があるので、肥料、播種時期、病害虫の予測などは先人の知恵を借りながら的確に応用できた。そして協力していただいた多くの人たちに心より感謝したい。

種子は、行政に相談しなくても種子会社に任せれば良い。パイオニア・ハイブリッドジャパン北海道担当の小森鏡紀夫さんからは種子のバリエーションや過去の種子情報は生産者に絶対的な安心感を与えていただいた。ありがたいことに今年は数年に一度の新品種を栽培できる機会を得たことと、除草剤はアルファードとゲザプリムを混用することにより、アカザが30㎝位になっても対応できた。

面白い話がある。この効果抜群のアルファード除草剤の使用は、登録上3～5葉期になっているが、小分け販売先の日本曹達に電話で、もっと遅い時期の使用は問題あるのか聞いてみた。

担当者は「5葉期までにした理由は、間違ってコーンをトラクターで踏みつけても茎が元に戻る限界だからです。本州ではよくこの手のトラブルがあり、米国のように専用機械（自走スプレーヤー）が普及していたら畦間のみを走るので、7葉期でもまったく問題なく散布していますが国内登録は別です」と回答した。これは日本の誰のための農薬登録なのか、規模拡大に歴史的影響力を持つ小作人根性をビジュアル化している。

肥料の管理は土壌分析をして、元肥と追肥の2回、成分的には小麦と同じ感じでカルシウムが足りないので、転炉スラグを2t／ha散布して健全なコーンに仕上がった。

収穫時期に分かったのだが、害虫は微妙に発生していた。**米国でも問題のコーンボア（アワノメイガ）**である。コーンの芯の中に侵入して食い荒らし、腐敗してカビが発生してカビ毒になるので要注意である。目視する限り1%以下の被害なので容認できるが、米国の経営規模での面積であれば数万ドル単位の被害になるのだろう。そうなると**コーンボアを防止するGMのBtコーンの国内栽培も期待**される。

しかし、不思議な話だ。Bt剤の殺虫剤はたっぷり散布して良いのに結果的に同じ効果のGMのBtコーンには反対？　メンデルの法則を習ったご子息たちは親たちの非科学的な姿勢に疑問を感じないのだろうか？　まっ、ありえないな。そして知ることになるのだ、黒い瞳からは金髪・ブルーアイは生まれないとね。

栽培自体は大豆や小麦よりも明らかに容易なことは間違いないが、その後の収穫作業が問題になる。国の新規作物何とか補助事業では半分補助で定価1200万円のコーンヘッダーを購入したら、実が地面に落ちることはないだろうが、ヒール・ミヤイにはそんなおいしい話は聞こえてこないようだ。

試しで作った10万円のアタッチメントを刈刃に装着しても本来の能力は発揮できなかった。仮にそんなことができたら、1200万円のコーンヘッダーに投資している米国人の生産者はバカか？ということになる。

今回はたまたま所有していた大豆を地面に沿うようにして収穫できるフレックス・ヘッダーの長さと相性が良かったので3%以内のロスで済んだが、すべてのコンバイン・ヘッダーでうまくいくとは限らない。

実際の収穫はヤンマーアグリジャパン、北海道カンパニーの平原功さんの提案でコーンヘッダー付の330馬力のJDコンバインの試験も兼ねて農場のコンバインと2台で行なった。当初はヨーロッパ・ジョン・ディアからの指示が間違っていたので調整に手こずっていたようだが、現地の判断を優先して、その結果**コーン畑には緑に輝くコンバインの御姿と美しい大地のコントラストが描かれる**ことになった。

完璧なコーン水分測定器を備えた乾燥機は国内には存在していない中、静岡精機の土井浩司所長の提案があり、農場の300石乾燥機の麦用水分測定器を大豆様に改造したが、乾燥過程で発生するコーンの粉で苦労するが、来年の完成を目指して研究することになった。

成長を続けなければ

ススキノ・ニューハーフバーへの招待を受けることになるヨイショ話はここまでで、やはり**一番の功労者は2012年度A・1グランプリ受賞者の地元・長沼町の柳原孝二さん**で、種子の手配、栽培方法、販売先確保などすべてに関与できたのは未来の農業を見通せたからであろう。

今年のパイオニア種子の原産国はヨーロッパ・オーストリアだが、来年は南半球産になる可能性もあるそうだ。なんともグローバルなお話であるが国内のコーンの取り巻く環境は、まだ成長を続けなければならない要素が多くあることも事実だ。

というのは種子、収穫機械、水分計、流通などの各分野がそれぞれの情報が生産者に全部伝わってこないのである。その結果、いまだ後出しじゃんけんがまかり通るようだ。麦や大豆栽培の場合、Eメールや資源の無駄遣いかと思えるくらいのペーパーが各所から送られてくるが、コーンはそのペーパー1枚すら存在していないのだ。各業界が集まり組織つくりの動きでもあるのかと思えば、各分野の思惑が優先するのか今のところ気配は感じられない。

「行政はコーンに関与するな……」って言ったけど、民間業界がこのあり様なのだから、このままではお金の再配分と農政を作っていただける行政に任せ、今後のJAにおんぶに抱っこしたほうが新規栽培を考えている人たちの利益になるのではないだろうか。残念ではあるが、これが日本農業の現実かと思うと、某米国種子会社の副社長が長沼に来られた時に「GMコーンは収量が25%上がりますよ」と発言したところで、両耳の中にイヤーワックス（耳垢）がたっぷり詰まっていては現実逃避者には理解できないのであろう。という過程を経験してコーンの今後の発展に期待しよう。